

小説

井上次雄・小野栄吉・宮崎眞弓 選

知事賞

白金

猪 子 羊之助（守山市）

金色が鳴き、そして弾ける。かちり、かちり……規則正しく、一部の狂いも無く。

おお、なんと香しい音色か。この世に、これほど人を陶然とさせる音があるうとは。

時は慶長五年（一六〇〇）四月、春雨に濡れて桜花も淡く匂う近江南東部、水口岡山城。伊勢へ通じる街道を扼する要衝である。その城主たる長束正家は、天守の薄明に一人座していた。より正確に言えば、天守の中に数多く運び込まれた木箱の中身を、唯一人、か細い灯火のみを頼りに確認しているのである。

木箱一つ当たりの大きさは正家が小脇に抱えられる程度

だが、その重量は相当なものだ。何せ箱一杯に小判が隙間もなく敷き詰められているのだから。……そして今、正家は収められた小判の枚数に狂いがいか、眼を刃のように細くして確認しているのであった。

長束正家と言えば、天下を差配する豊臣家の台所を預かる当代随一の理財家である。その卓越した算勘をもつてあらゆる戦の輻重に数多の国々の検地、更には豊臣家直轄の蔵入地及び知行方における会計をも取り仕切り、水際だった手腕を発揮。豊臣家の金倉を溢れんばかりに満たし続けたその功績は大きく、大名として軍事及び経済両面で重要な近江水口十二万石を任されるのも当然であつたろう。

今年で齢三十九、官位は従四位下侍従。そのような栄えある身の上で、この長束正家という男は、今、何をしているのか？……前述の通り、どこか饞えた臭いのする暗がりの中で、小判を一枚二枚と数えているのである。鋭い目付きが特徴の小作りな顔に、黒蜜が滴るような、締めりの無い笑みを浮かべて。

「二十二、二十三、二十四……」

二十五。数え終わると、一纏めにして切餅とし、漆で黒々と塗り込められた木箱に戻す。寸分違わず、全く同じ箇所へだ。この木箱は正家の手製であり、中は木枠で仕切られ、小判百両がびたりと入るように設計されていた。

灯火が、不安げに明滅を繰り返し始めた。微風に他愛もなく弄ばれ、しきりに影を揺らめかせる。……つまり、刻限だ。

正家は最後の一箱を量り終えると、小判を一枚だけ抜き取り、懐に入れた。残りは蓋をし、紐で結ぶ。一刻程も座ったままであったのに足が痺れた様子もなく、すつくと立ち上がる。例の不気味な笑みは、跡形もない。

まるで計ったように、階下から小姓が顔を覗かせた。

「来たか」

「はっ」

「茶室は」

「仰せの通り、庭に」

まだ若い小姓は、簡潔に答えた。この主は、無駄口を極端に嫌う。

「屋敷へ参る。申し伝えた通り、そこで野点^{のだて}を行う。客人にあつてはくれぐれも粗相のないように。儂が到着した

後は皆、席を外せ。……所謂風流というやつだ、心配はいらぬ」

小姓は、黙って頷いた。そうさせるだけの迫力が、今の正家にはある。

刻は夜半。空は良く晴れ、月明かりも十分。

（しかし、夜に野点^{のだて}とは）

木々がざわめいている。北風が、強い。

時を、少しだけ戻す。

慶長三年（一五九八）八月、豊臣秀吉、御逝去。重篤な病という事で予感があったものの、その知らせはやはり驚動地の衝撃を時代に与えた。戦雲が再び、流れ始める。秀吉には嫡子がいる。豊臣秀頼であるが、未だ六歳と幼く、自身で政務を執り行うことは出来ない。それは秀吉とて百も承知、日に日に弱る体力氣力を懸命に奮い立たせ、残された命の全てを息子のために搾り尽くす。……結果として生まれたのが後に『五大老』『五奉行』と呼ばれる政治体制であった。

その眼目は、いかにして秀吉亡き後、最大の實力者たる徳川家康を抑えこむかにあった。経歴・信望・人材・軍事力、その総合力に単独で並び立つ者はいない。故に秀吉は

家康を自身亡き後の豊臣政権筆頭として五大老の一人に据えるも、尾張以来の付き合ひであり家康に次ぐ実力を有する前田利家に秀頼を託し、更に上杉景勝・毛利輝元・宇喜多秀家といった大身の大名達に同等の地位を与えることで牽制させる、という形を取った。

しかしそれだけでは心許ないとして、政権における実務の担い手となる五奉行を置いた。前田玄以、浅野長政、増田長盛、石田三成、そして長束正家の五人である。五奉行は必ずしも五大老の下という訳ではなく、逆に掣肘しうるだけの力を有した機関であった。仮に家康が無理押ししようとも、彼等の合意無くしては権力を振るえぬ仕組みを、秀吉は今際の^{いまわ}際に整えたのだ。全ては幼い我が子の未来を案じるが故であった。

さて徳川家康であるが、やはり秀吉が睨んだ通り大望を有する武士であった。秀吉が世を去った途端、豊臣家に無断で伊達家を初めとした他家大名との婚姻を秘密裏に押し進めたのである。みだりに大名同士婚姻してはならぬと秀吉は遺言したのだが、家康はそれを踏み破ったのだ。

そうと知った前田利家は激怒した。

「おのれ！殿下が亡くなつて間も無いというに、家康め」
五奉行も即座に動き、家康が秀吉の遺した掟に背いた旨

を弾劾。一度は戦も辞さぬという態度を示した家康ではあったが、最終的には掟への違背を認めた。

つまり表向きには家康の方が間違ひを認めたのである。利家と五奉行が団結している内は家康としても好き放題は出来なかったのだ。

しかし諸行は無常である。慶長四年（一五九九）閏三月、肝心要の前田利家が病で世を去ったのであった。

これにより、力の天秤は家康に傾く。

更に家康にとって追い風となったのは、加藤清正、蜂須賀家政、黒田長政等七将による石田三成襲撃事件である。

豊臣政権内に鬱積した武断派と文治派の軋轢に加え、先年の唐入りにおいて総奉行を務めた三成の監査が著しく公正さを欠いたということで、実際に現地へ出征した清正達武断派は怨みを募らせていた。そこに前田利家という重しが失われたことで、ついに激発したのであった。

「なんとかな」

大坂屋敷にいた三成は事態の火急を悟り、昵懇であった佐竹家の助けを借りて伏見へと脱出。無事自身の屋敷に辿り着くも、怒り心頭に達した七将と事を構える兵力はない。それに何より、利家亡き今、豊臣家の家臣同士が刃を交える事は断固避けなければならぬ。

「ならば！」

石田三成、乾坤の一策を放つ。向けた先は誰であろう、徳川家康だ。

かかる事態に家康も張り詰めていたが、ここで更に急転直下の知らせが射込まれた。

「三成が、単身助けを求めて参りました」

「なんと」

百戦錬磨の家康も、思わず身を乗り出した。

（若僧め）

家康もこれには苦笑いするしかない。随分と思いついた手を打ったものだ。しかも真正正銘、捨て身の一手である。その意味を、家康は正確に理解していた。三成は命懸けで自分を試しているのだ。……窮鳥懷に入れば獵師も殺さず、身一つで救いを求めてきた者をもしこれ幸いと捕縛し七将に引き渡せば、徳川家康の男は地に落ちるだろう。家康の世評を道連れとし、溜まりに溜まった武断派武将達の不満に怨恨怨嗟、それを文治派筆頭である自身の死によって一挙に解消する。

そうなれば、豊臣家中は自ずと団結する。結果として、徳川の天下取りは遠のくことになる。徳川家だけで覇業を成し遂げるのは現状困難であった。だからこそ他家との婚

姻を多少強引にでも進めたのである。

そして、何よりも、時間であった。家康もそろそろ齢六十に手が届く。自身に残された時間はそれほど多くない。天下人となり新たに徳川政権を築くに当たっては、豊臣家内部の確執を利用し、大戦を引き起こすことで一度地ならしをしなければならぬ。そのために、三成は必要であった。

「助けよ。くれぐれも丁重にな」

家康は両者の仲裁に入る。結果、三成は政務より引退、領地である佐和山で隠居するという運びとなった。家康としては、自身の存在を示した上、厄介な五奉行の力を削ぐことも出来た訳だ。

その後も、家康は豊臣家の五大老筆頭として精力的に活動する。他の大名家にあつては島津家における庄内の乱、宇喜多騒動、そして前田家による家康暗殺疑惑など、家中を揺るがす大問題が次々に出来る。しかし、徳川家康はどつしりと貫禄を見せ、或いは老獺に振る舞い、いずれも自身が公儀として事態を見事に收拾してみせたのである。徳川家康の勢威はいや増すばかりであった。

以上、慶長の世は嵐の吹き荒れるところな訳だが、件の長束正家はどうしていたのか？

別段、何もしていない。

豊臣政権の財務担当として、大坂城内にて肅々と算盤を弾くのみ。その算勘を駆使し、日々大量に持ち込まれる案件を処理していた。

どんな世であれ、人が集まれば経済は回る。それに伴い問題も発生する。秀吉在世の頃と何も変わらない。だから正家の職務も変わらない。眉間には深い皺が刻まれ、鬢にも白い物が目立ち始めたが、集中力に衰えはない。

豊臣か、それとも徳川か。去就に迷う周囲の者達からすれば、それは小面憎く映った。

「見よ、あの落ち着き様を」

「この御時世に、よくもまあ平然と」

「ま、儂らとは出来が違う御仁じやて」

「と、いうと？」

「いいか、長束殿と言えは押すに押されぬ当代一の算盤達者、銭が物を言う今となつては豊臣家にとってなくてはならぬ人物じや」

「はん、存じておるわい」

「それだけではないぞ。奥方は、徳川家の重臣、本多忠勝殿の妹君じや」

「ふん、過ぎたる嫁、と言う訳か」

「その縁もあつて内府殿の覚えもめでたく、更にはその世継ぎとも……」

「ええい、もうよい。一見無愛想に見えて、皮算用に付いてはまことお手のもの、ということであろう。二股とはなんと汚らわしい」

「まあ、二股、二枚舌は他にも……いや、やめておこう。壁に耳あり障子に目ありじや」

物陰で密談に耽る者達を知つてか知らずか、正家は今日も筆と算盤を手文机へ向かう。

頭の中は、常に数字で溢れていた。業務に関わるありとあらゆる変数が、絶えず脳内を回転し、反芻し、弾けている。数字は海であり、正家は風と潮流を読む航海士であった。

大抵の問題は、程なく然るべき数式へと収束する。無駄を徹底的に排し、合理という羅針盤そのものとなったそれは実に涼やかだ。それを見出すことに精力を注ぎ込んでいれば、不安の波に攫われることもない。……目の前の数字に集中し、そこに秩序を見出すことに没頭すれば、余計な事は何も考えずに済む。

人間は忠において単純であるべきであると、正家は最近思うようになった。現実にはそれが可能であるかはまた、別

の話になるが……。

「……殿。殿」

何度、呼ばれたのか。正家は、気が付けば釣り上げられ、静穏な数字の大海から混沌とした息苦しい陸上へと引き戻されていた。

「何じゃ」

正家の物言いは、ぶっきらぼうで不機嫌そのものであった。しかしいつものことである。

「申し訳ございません。前田様が、是非お会いしたいと」

「今からか」

正家は露骨に眉を潜めた。……が、すぐに筆を置いた。相手が同じ五奉行の前田玄以ともなれば、すげなく断る訳にもいかぬ。

「すぐ参る」

付き合ひ、政治、処世術。いずれも煩わしいことこの上ないが、ここで大名として生きていくには仕方がない。社会に寄りかかって生きるということは、安全安心と引き換えに元来単純であるべきものを複雑怪奇にしてしまうということなのか。……苦痛だが、やはり、仕方がない。

その苦痛も、いつしか鈍くなりつつある。自身の中にある数式が濁るのを感じながらも、それをどうすることも出

来ないまま、正家は立ち上がらざるを得なかった。

この前田玄以という男は、常に微笑みを絶やさない。少なくとも正家の記憶にある限りではそうだ。

今、臍に白煙を吹く茶釜を挟んで向き合っている玄以もまた、皺深い顔に茫洋とした微笑を湛えている。

「ますますもつての御精勤、見事なものにございます。こと理財にかけては、長束殿の右に出る者なしと皆褒めそやしておりますぞ」

「前田殿の手並みに比べれば、大したことはございません」
「いや、いや。恥ずかしながら近頃、手も足も思ったようには動きませんで。気が付けば既に齢も六十二。歳は取りたくないものでございます」

「御謙遜を」

口は以前にも増して回るようになったではないか。反射的にそう吐き捨てそうになり、正家は腹に力を入れて堪えた。

差し出された茶を形式通りに受け取り、呑む。茶はぬるかった。これは玄以が呑みやすいようにと気を遣ったのであるが、正家には逆効果であった。

ぬるい。かえって神経がささくれる。正に茶番ではない

か。このような会合に、何の意味があるのか。……無論、政治である。そう、苦痛であつても、仕方のないことなのだ。

「命冥加に長らえた分、哀しみも多くございました。……大事な御方に先立たれるのは、辛うございますな」

それにしても、相手が悪い。

前田玄以はかつて織田信長の嫡子である信忠の下で辣腕を振るつた吏僚である。元は僧であり、有職故実に詳しく、主に京の政界において活躍した。その隠然たる実力は秀吉も認めるところで、豊臣家においてもその人脈共々重宝されたのである。

海千山千。数字に抛らず、人間というものに知悉した男。……自分が精巧に造り上げた能面、その隙間にぬるりとした指先が忍び込んで来そうな、不安感。止め処ない奇妙な親近感、そして、誘惑。

正家は改めて姿勢を正し、気を練り上げた。そして脳内で、小判を数える。かちり、かちり……心が、霞んでいく。玄以はその禿頭をやりわりと傾け、茶を殊更ゆつくりと呑み下していた。正家もまた、残りの茶を静々と嘗める。不味い。ただ、それだけだ。

「さて、本題に入りましょうか。……内府殿の使いが、

明日、こちらに参られます」

「左様で」

「急ではありますが、会つて頂けますかな。無論これは、豊臣家の御為にございます」

「……」

「言葉を重ねずとも、分かつて頂けるかと。他ならぬ長束殿なれば……」

ほほ、想定通りの内容である。つまり、玄以は家康と既に内通しているのだ。そして、自分をも抱き込もうとしている。

「内府殿は、息子共々、長束殿とは長く懇意にしたいと仰せで」

その時である。

正家の顔から、ふっ……と表情が消えた。

色白で、鼻梁の通つたやや端正に過ぎる顔は、能面よりも無機質となつた。

この反応は意外だったのだろう。玄以の微笑が焦燥で歪み始める。……しかし、それは黒子程も大きくならぬ内に鎮火した。

「承知しました」

「おお、承知して下さるか」

玄以は内心胸を撫で下ろした。先程正家が見せた反応、それは玄以を以てしても予想外だったのである。

（あれは、何だったのだ？）

だが、玄以はそれ以上深く考えなかった。他人の事など、本当に分かる訳がないのだ。必要以上に関心を持つべきではない。何事も深入りしないこと。それが身を保つコツだ。今の玄以はもう、生きることに関心疲れを覚えている。

（苦しみたくなかった。ただ、安らかに朽ちたい。）

（そなたも、そうではないのか）

微笑みという灰で己を包む。誰の敵にもならず、味方にもならない。それでいい。

玄以は、正家に今、必要な事だけを伝えた。

夕闇が、濃くなってきている。

刻は、物語の冒頭へ向かう。

家康と三成は盤面を挟み、それぞれ着実に手を進めていた。大戦の機は、熟しつつある。

それで正家はどうするのか？どちら側に附くのか？……どうにも、はっきりしない。家康の使者に会ったのは例の一度きり、それ以降も正家に変わった様子はなく、ただ鉄の如く、機械の如く、職務に励むのみ。

「両端を持するとは、あのことよ」

「これだから奸智に長けた者は始末が悪い」

自称忠義派の陰口をたまさか小耳に挟んでも、無関心、無反応で通した。ひたすら職務、職務である。……ただ、そこには、ある種の気魄のようなものが滲み出ている。

こうなると周囲の口さがない者達もいよいよ気圧^{けお}され、終いには薄気味悪くなり、

「長東殿の心は、小判で出来ているのか」

ついには正家を避けて通るようになった。

「領地にて、政務が滞っておりまして」

だから居城である水口岡山城に戻った際には、多くの者が内心ほっとしたものだ。

それでも、正家は変わらず職務第一で過ごした。留守の間に溜まった案件を、一つ一つ迅速的確に片付けていく。その働き振りに家臣達も感じ入り、家中はよく纏まっていた。

石田三成がひっそり訪ねてきたのは、山積みになっていた案件がほぼ片付いた頃である。

水口岡山城は山城である。麓には城下町が賑々しく築かれており、その外れ、山間の場所に正家の別邸がある。

主に収集した書物の保管庫として用いており、実際に寝泊まりしたことは多忙もあつて数える程しかないが、手入れはされている。敷地の割には大きな庭園も含めて。

正家と三成は、そこで対峙した。

「驚いた。お主が風流を解するとは」

いや、これは、果たして風流なのか？

星が降り、風が鳴く夜。庭園には、確かに即席の組み立て式茶室が設けられていた。

問題はその外観だ。漆が黒々と塗り込められた戸板が広々とした空間を覆っており、内側にある篝火を外に漏らさず閉じ込めている。その入り口には竹を組んで棧橋を模していることから、これは茶室というよりも、軍船と言った方が正確であろう。

「ふん、それは皮肉か、三成」

「まさか。これはこれで趣がある」

今、この茶室には二人しかない。数人の供回りの者共は外で待機していた。彼等には何があつても話が済むまで中に入つてはならぬと厳命してある。

正家は、三成に席を勧めた。

茶を、点てる。正家にも茶についての心得は並以上にあつた。

茶を、椀に注いだ。白煙が匂い立つ。

「まあ、吞め」

正家の口振りは、やはりぞんざいであつた。しかし三成の顔は綻^{はら}んでいる。彼からすれば、いつもの正家だつたらだ。

差し出された碗を、傾ける。一口吞んで、目を見張つた。湯の温度は高い。それが茶葉の質と合うのか、爽快な香りが五体を駆け巡つた。血の色が瞬間鮮やかになったような気さえする。

「これは、美味い」

「ふん」

「世辞ではない。腹の底から感心した」

「隠居祝いじゃ。そうでなければ、この世で最も不味い茶をくれてやったのだが」

「それは助かつた。隠居も悪くない」

正家は渋面、三成は明朗。ほぼ同年代ということもあり、二人の表情はまこと好一對と言えた。

しばし、沈黙が降りる。月は、明るい。しかし風は強く、流れゆく雲が明暗と陰影を呼ぶ。篝火によつて生まれた二人の影は炎の揺らめきと共に衝突しては離れる。

「家康が動く」

三成が、口火を切った。

「目標は上杉じゃ。近々軍を催し、豊臣家の意に逆らう者を討つという名目で会津へ向かうであろう。その機を逃さず、僕は立つ」

正家の瞳が細くなった。

「毛利を総大将として仰ぎ、大坂城に拠ってもらう。秀頼公の御旗の元に兵を募り、一丸となって東へ疾走、家康の背後を衝く。毛利と上杉、両家とは既に盟約を結んである」

三成の言葉には、その端々にまで並々ならぬ熱が迸っていた。雄弁とはこのことを言うのであろう。その気炎を、正家は認めた。

しかし、その洪面は動かない。

「好きにすればよからう」

「豊臣と徳川、両雄は並び立たぬ。ここで決着を付けねばならぬのだ」

「だから、好きにやれと言っておる。邪魔はせぬ。だが、それ以上の事もする気はない」

そこまで言って、正家は自分の腕に口をつけた。途端に眉間へ皺が寄る。思ったよりも茶は冷めており、苦味が強く出たようだ。

「戦には、大義が必要だ。お主が発起人となり、前田と増田を説得の上、三奉行連名で家康を告発して欲しい。これは、現職であるお主にしか出来ぬ」

正家の細眼が、ぬるりと怪しく光った。

「三成よ、ここではつきり言っておく。僕はお主と家康、どちらにも附きたくない。いや、能うならば蚊帳の外にいたい。関わり合いになりたくないのだ」

「……」

三成は、瞑目している。

「三成よ。長く共に働いた者への義理として、一度だけ言おう。やめておけ。太閤が世を去った時、お主の役割もまた、終わったのだ。何より、今は隠居の身ではないか。この際じゃ、本当に隠居してしまえ」

「それは、友垣としての助言かな」

「馬鹿を申せ。ただの腐れ縁よ」

「腐れ縁か」

言い得て妙だった。

元々、長束正家は織田信長の宿老、丹羽長秀の家臣だったが、その事を気にしたことはない。三成にとつて重要なのは、主君である秀吉が必要とする能力を備えていることだ。

「佐吉よ、あれは大した男ぞ。少々偏屈ではあるが、そこはまあ御愛敬じゃわ」

秀吉の眼に狂いはなかった。共に働くようになったのは丹羽長秀が病で亡くなった後のことだ。秀吉が請うて丹羽家から引き抜いたのである。そして、正家は見込んだだけの働きを見せた。

輻重、検地、蔵入地の管理。そのいずれにも正家は抜群の才覚を示した。計算が速くて正確、というだけではない。水運陸運問わず、人・物・金の流れ、つまり物流を細かい所まで完璧に把握していたのである。正家の作成した書類を一読すれば、そこに人の生活が匂い立つ。暮らしには何が必要なのか。それはいつ、どこで、誰が、どのようにして、どのくらいの期間で作られるのか。人々の手に渡るまで、誰がどのようにして運ぶのか。どこに集積され、どのような形で売られるのか。各工程でかかる費用は、金の巡りは……全ては大河のように流れ、そして循環していた。物流とはつまり国の血流そのものののだ。

算勘については三成も人後に落ちぬと自負していたが、すぐに敵わぬと認めた。認めた上で、教えを請うた。……正家は初め難色を示したが、三成は諦めず、情熱で迫った。

「是非、是非、教えを請いたい」

「ええい、しつこい」

結局、正家は根負けし、多忙の合間を縫って洪々講義をした。三成は真綿が水を吸うが如く知識を吸収し、己の視野を大きく広げたのである。……正家の方も、決して口には出さないが、大いに刺激を受けていたのだ。歳が近いということもあつたろう。

（お主には負けぬぞ）

（ふん、言っておれ）

二人の腐れ縁は、そうして結ばれたのだ。……いや、実は、もっと昔に縁はあつた。

「この茶室に用いた板材は、かの信長公の大船を解体した時のものか」

正家の、ほとんど閉じられかけていた瞳に、硬質な気が駆け巡った。その熱量は、先程三成の吐いた気炎にも劣らぬものだ。

「漆がよく塗り込められているから分りにくいだが、所々岩に擦ったような跡がある。これは船底の板材かな」

「当て推量にしても、飛躍し過ぎだな」

「この軍船を模した茶室。そして、貴公の燃える白刃のような眼光。そして、庭にかけて、丹羽。この三つが、儼のとある記憶を呼び覚ました。当時、おそらく誰よりも大

船に焦がれたであろう少年の記憶じゃ」

正家の眉間に、蒼い稲妻が奔^{はし}つた。

闇が、圧力を増していく。

「琵琶の大神。信長公の命によって建造された、前代未聞の巨船。私はその頃、まだ寺の小僧をやっていたのだが、琵琶の湖にそのようなものが現れると聞いてはいても立つてもいられず、飛び出していったのだ」

そう、それはかつてない規模の船であった。琵琶湖に全容を見せたのは浅井氏を近江から追いやりつつあった元龜四年（一五七三）七月のこと。……船の全長は三十間（約五十四メートル）、幅は七間（約十二・六メートル）、櫓は百挺で船を動かし、舳先と艫には矢倉が二棟備え付けられていたという。船体の大きさだけなら現代の琵琶湖を航行する外輪船『ミシガン』にも匹敵する。

そんな巨船が湖上に現われたということで、近江の界隈はその話で持ちきりであった。

当時の三成はまだ少年、石田佐吉という名で寺の小僧をしていた。上手く寺の用事をこじつけいざ来てみれば、怖いもの知らずの佐吉も流石に肝を潰したものである。

（一体、どうやってあんな船を造ったのだ）

今までに見てきた船とは何もかもが違う。城をそのまま

船にしたような感じがするのだ。

佐吉は好奇心を抑えきれず、それとなく聞き込みをした。噂ではあったが、造船を担当した者は岡部又右衛門という城大工であり、佐和山の西にある松原内湖にて建造。近江国中の鍛冶師及び大工を集め、約一ヶ月という短期日で造り上げたのだという。

（信長とは、すごい男だ）

佐吉少年は興奮も冷めやらぬ中、帰途についたのだが……実はその道すがら、幼き長束正家の姿を実際に目撃していたのである。

「大船を見た日の夕刻。私は寄宿していた寺に戻る途中で妙な少年を見つけてな」

村という村はお祭り騒ぎであり、見物客でどこもかしこも沸き立っていたが、一人だけ場の空気にそぐわぬ者がいた。

背が高い訳でも、逞しい訳でもない、色白でやせっぽちな子供。それでいて眼光だけが紅蓮に燃えていた。子供は、憤怒していた。両眼から血涙を流さんばかりに、湖水に浮かぶ大船を睨み付けていたのだ。

群衆もその底深い怒気に気付いたようで、少年が歩き出すと慌てて道を開けた。それは水面が自ずと割れていくよ

うで、ちよつとした見物だった。

(はて、何者だろう)

佐吉は後を付けることにした。一見した所、自分と同じ小僧と思われたが、佐吉と比べて細身である。歩き方からして武術の心得もなさそう。実際、尾行に気付く様子もない。

いかにもひ弱そうなのだが、とにかく刃のような双眸から放たれる眼光が尋常でなく、それだけで貧弱という印象を打ち消していた。

佐和山城主は当時、織田信長その人である。

(まさか、信長公その人に直接目通りするつもりか)

幾ら何でもそれは無謀だ。まして子供である。相手にされる筈がない。行動力に溢れる佐吉少年でも夢想だにできなかったことである。

しかし、前にいる少年は真つ直ぐ城を目指し、堂々と胸を張って歩いていくではないか。

(おいおい、ちよつと待て)

尾行者の不安も露知らず、この目付きの悪い少年はずんずん進む。……が、城門に近付くと、流石に武装した織田の兵士に押し止められた。

「小僧、早く寺へ帰れ」

「離せ、ええい離せ」

ところが、この名も知らぬ小僧、一向に諦める様子がない。門番に突き飛ばされても、遮二無二掴みかかっている。

(馬鹿な。一体何を考えているのだ)

物陰に隠れて興味本位の観察なんぞしている自分のことは棚に上げてはらはらしていると、不意に暖かな風が頬を撫でた。

「これは、丹羽様」

気色ばんでいた門番達も、慌てて畏まった。それもその筈、物々しい具足に身を包みつつも陽だまりのような微笑みを湛える壮年の武者こそ、織田家宿老、丹羽長秀その人だったのである。その背後には彼の率いる一隊が整然と行進し、家紋である×印、所謂『直違紋』が湖風に翻っている。

(あれが、かの米五郎左か)

佐吉少年、思わず息を忘れた。それだけの清澄な気配を、長秀は五体から放っていたのだ。その体軀は中肉中背で格別どうというほどでもないが、その奥底に秘めた熱量は雄大そのものだ。

極度の興奮状態にあった例の小僧でさえも、その気宇に圧倒されたのか、押し黙っている。……しかし、その眼光

だけは、未だ爛々と煮え滾^{たぎ}っていた。

長秀は膝を折り、少年と目線を合わせた。

家臣達が驚くのを尻目に、言の葉を紡ぐ。

「僕は、丹羽五郎左衛門長秀と申す。この佐和山の城を守るのが目下の勤めじや」

「……」

「お主の名は、何と申す」

「……」

長秀の双眸が、気炎と共に喝と見開かれた。

「僕は、名乗った。お主も男ならば、名乗れ。子供も大人も関係ない。これは、礼儀ぞ」

「な、な」

「む？」

「長束、新三郎」

「新三郎か。よき名じや」

何を思ったか、長秀はそのままその新三郎とやらを自分の屋敷へ連れていったのである。

「あの大船は見た目こそ壮観であつたが、船として見た場合は、お粗末だった。何せ船体が重すぎて、回頭もろくに出来なかつたのだからな。漕ぎ手の負担も大きく、軍船

としては粗悪であつた。だから信長公も幾度か使用した後、早々に解体を命じたのだ」

天正四年（一五七六）、大船は堅田において早舟十艘に造り替えられている。

「その通り。よく調べたものだ」

「やはり、あの時の小僧は貴公か」

「ふん。まさかお主に見られていたとはな」

正家は、残っていた茶を一息に呑み干した。茶は冷めており、この上もなく苦い。だが、気付けには丁度よかった。

三成も、茶を静々と呑む。思つた以上の苦味で、舌が軽く痺れたようになったが、こういうのも悪くはない。気が引き締まる。

「まったく、浮世というものは、思うに任せぬなあ」

三成は、からりと笑つた。

「お前がそれを言うか。お前はいつも、自分の思うとおりに生きてきたではないか」

「そう見えたか」

「見えた。それが、僕には忌々しかった」

三成は、改めて茶碗に視線を落とした。底に濁った茶の溜まりがある。冷めた今、もう味を論じるようなものではない。しかし、何かと問われれば、やはり茶ではあるのだ。

三成は、何とはなしに茶碗を星空へ向けた。掴めずとも、その瞬きは確かにそこにある。

「そうだな。秀吉様が御壮健であらせられた時は、そうだった。夢中だったのだな。あの御方の為ならば、いかなる困難にも全身でぶつかる事が出来た。生きていると感じた」

「今は？」

「炭だ。秀吉様がこの世を去った時、私もまた、死んだのだ」

「正しく用済みということか。ならば、そのまま死んでおけ。炭もいずれは灰になる」

「生憎と、それは出来ぬ。今際に、頼まれたのだ。息子を、頼むとな」

「遺言か。なんと厄介な」

しかし、三成はやはりからからと笑っていた。その内側から発する熱は、高まり続けている。本来熱を持たぬ月光にさえ、温もりを与えるほどに。

「確かに、厄介だ。しかし、私にはそれが必要だったのだと今にして思う。あの遺言が、気付かせてくれたのだ。見てくれの悪い炭こそ、むしろ何よりも熱く燃えるということ」

「呆れた奴だ」

「誰しも、命は一つ。ならばこの上もなく燃やし尽くしたい、とは思わぬか。……いや、お主こそ、誰よりもそう思っている筈だ」

正家の表情から、渋味が消えた。

「何のことだ」

「その躰だ」

夜空より降り注ぐ月の光は、あまねく長束新三郎正家という男の正体を写し出していた。一見して色白の細身ではあるが、その内側はよく鍛え上げられており、引き絞った弓を思わせる。……何より、その掌は分厚く、節くれだっている。日々刀を振るわなければ、こうはならない。

その五体には、武の理が刻み込まれていた。

「よくもそこまで磨き上げたものよ。私が隠居した後も錬磨を続けていたか」

「儂からすれば、剣もまた、算勘。この肉体に宿る算勘を、自分なりに磨いただけよ」

月が、叢雲に隠れた。闇の帳が降りる。そう、ここは軍船。炎爆^はぜる戦場である。

「正家。共に戦って欲しい。そして、秀頼公の下、新たな世を創るのだ」

「儂の力など、たかが知れている」

「他の奉行達を束ね、牽制する、これはお主にしか出来ぬ。それに、本当の出番は戦が終わった後のことだ。……交易推進のため、新たな船を造って欲しい」

「儂は」

正家の瞳が見開かれ、玉鋼の如く光った。闘争を迎えた漢の色だ。

「太閤が嫌いじゃ。だが三成、お主はそれ以上に嫌いじゃ。人の気も知らず、所構わず正しく銀色に光り輝くお主がな。……そんな儂が、お主に組すると思うか」

「思う」

「何故」

「徳川の御代では、お主の望みは叶わぬ。それをお主は、誰よりも分かっているからだ」

夜風の鎗矢が、吹き抜けた。

両者は無言のまま、すつくと立ち上がった。

正家は、自分の後ろに置いておいた長持ちを開け、二振りの刀を取り出した。一振り、無造作に放る。刀は、吸い込まれるようにして三成の掌へ収まった。

三成は鯉口を切った。握り、刃紋、いずれも申し分ない。十分に研ぎ上げられている。装飾は最低限の、無骨な実用

一辺倒の太刀。

「構えろ」

「応」

二人とも、申し合わせたように中段へ構えた。……気魄が、満ち満ちていく。

（これは）

三成は、内心驚愕していた。自身は若かりし頃から剣術を学び、弛まず鍛錬し続けてきた。修羅場も相応に潜っている。

その自分が、容易に動けない。なぜなら、今まで相対してきたどの相手とも、正家は異なっていたからである。

隙は、幾つかある。三成の眼にはそれが見て取れるが、同時に言い知れぬ悪寒を覚えた。罨だ。……つまりは三成を誘った上で後の先を取るつもりだろう。ただ、それのみに賭けているのだ。

両者共に、額に汗を浮かべている。放たれる剣気は、今尚拮抗していた。技量では、三成が上回っている。それを認めた上で、正家は戦術を練り上げていた。自らが得意とする算勘と、ここまで鍛えた剣術の融合。相手を徹底的に分析した上で、その出方をその一挙一動から正確に演算、脳内で試行する。正家は、三成の動きに対して瞬時に追従

出来るだけの剣術を身に付けていた。

迂闊には、踏み込めない。間違ひ無く、斬られる。正家は今あらゆる雑念を捨て、間合いに踏み込んだ者を斬り捨てるだけの機械となっているのだ。

このまま、正家の息が上がるのを待つか？ しかしそれでは駄目だろう。自分は、試されている。そして正家は、自分自身をも試していた。ならば、正面からぶち当たってこそであろう。そう、自分の全てを曝け出さなければならぬ。真の勝負とはそういうものだ。

放射された剣気は白波となり波濤となってぶつかり、渦を巻く。……拮抗は長く続かない。いかなる場にも潮目はある。

刹那、雲間から月が顔を覗かせた。

三成は全霊にて踏み込んだ。

金色が鳴き、そして弾ける。かちり、かちり……規則正しく、一部の狂いも無く。

剣の手解きは、主たる丹羽長秀から受けた。

大船に魅せられ、引き寄せられるように長秀と出会った。正家は、今でもそれを運命と信じている。きつと、あの時、自分の背骨にある数式が灼熱していたのだ。

請うて長秀の小姓として仕え、やがて丹羽家の勘定方となった。

「丹羽家の米倉を、一杯にしてみせます」

「それはよい。この米五郎左にはこの上なき男よ」

長秀は、いつも完爾と微笑んでいた。それは正家にとつて何よりの安らぎであり喜び。それを守るため、自身の持つ力を鍛えに鍛えた。得意の算勘はやがて力学へと発展する。数字とは力を表す記号である以上、長じれば必然と物理へ結びつく。その知見は、後に長秀が総奉行となった安土城築城において大いに役立ったのである。

丹羽家において正家は新参者であつたが、その骨身を惜しまぬ働きは皆認めていた。……しかし、まだ、足りない。

正家は、造船についても貪欲に学んでいた。

丹羽長秀を、自分の造った船に乗せる。そして、共に大海原を往く。それが、初めて出会った時から抱き続けた、正家の夢だ。

しかし、やはり、諸行は無常……丹羽長秀は、病を得て、死んでしまった。

正家の心は、襤褸布のようになった。

（こんなことは、有り得ぬ）

しかし、哀しみに暮れる間もなく、丹羽家に嵐が訪れる。

天下人となった豊臣秀吉から、減封処分が下されたのである。

それだけではない。会計上不正があつたとして追求の手が伸びてきた。

「各々方、御安心めされよ。勘定方である儂が申し開きを致す」

これが最後の御奉公。正家は死を決し、自ら作成した帳簿を以て、評定の間において敢然と秀吉に立ち向かつた。

正家の言には一部の曇りも無く、全ての嫌疑は無事に晴れたのである。

問題は、その後だつた。

「いやはや、流石は名判官と謳われた長束殿よ。此度の釈明、本当に見事であつた。……どうかな、長束殿。今回の一件でも分かる通り、儂にはまだまだ優れた人材が足りぬ。だから、率直に言つて、お主が欲しい」

「いや、それは……」

「儂の元に来てくれれば、此度のような事が二度と起きることもなからうて。な、な」

天下人の意志である。正家としては、丹羽家を去り、豊臣家に仕官する他はなかった。

だが……正直、さしたる抵抗も無かつた。敬愛する主君

はもういないのだ。そして、丹羽家にも義理は果たした。

(もう、なるようになれ)

正家は、帆の破れた船だつた。艀を漕ぐ気力も湧かない。ひたすら流され続け、摩耗しかけた丁度その頃、三成と出会つたのである。

正家の集中は、途切れていない。

脳内で、小判を一枚、二枚と数える。規則正しく、一部の狂いも無く。それは、旧主を喪い、精神が不安定になりがちだつた正家が墮落の間際で発見したルーティンだつた。経済の象徴とも言える小判。これらの発する光と音に没頭することで、正家はあらゆる雑念から脱し、己という矮小な存在を強く知覚出来るようになった。

ただ、小判には強烈な毒気があり、その香気に酩酊することもままあつた。……ああ、なんと香しい音色か。この世に、これほど人を陶然とさせる音があるとは。儂はこんなにも沢山小判を持っている。ああ、無性に嬉しい、温かい。もっと欲しい、ずっと数えていたい……ここまで金色の誘惑に屈せず、何とか自分を見失わずにおれたのは、劍の鍛錬によるものか。

いや、今にして分かる。負けたくない相手がいる、とい

うのが、やはり大きかったのだ。

三成の動きは、ほぼコマ送りで見えていた。想定より速いが、今の自分なら対応可能だ。・・・誤差を修正し、勝利への太刀筋を即座に弾き出す。頭われた道筋を辿れば、勝つ。

太刀は月光を受け眩く輝いていた。それはいつそ白々しかった。もう、互いの顔と、太刀しか見えない。もう他を見る必要はない。全ては燃え尽き、灰となるのだ。

三成の末期は・・・会心の、日輪のように熱い笑みだった。

戸惑いの前に、何か黒い物が真下から正家の顔面を襲った。三成の茶碗だ。完全に想定外の事態、正家は反射的にそれを迎撃してしまった。茶碗は砕けたが、底に溜まった雫は破片と共に正家の視界を覆う。

銀の流星が、直違った。

「・・・っ」

破片は頬を浅く切っただけだが、勝負は決した。三成の刃は、正家の首筋にびたりと触れていたのだ。

「儂の負けか」

糸が切れたように、正家はその場へ座り込んだ。実戦経験の不足。敗因の一つはそれだろうが、悔しいという気持

ちはまるで湧いてこなかった。……然るべき所に結果が収束した。それはやはり心地よいものだ。例えそれが自身の負けだとしても。……太刀は、鞘に収まったのである。

「にしても、茶碗を蹴飛ばすとはな」

「咄嗟の思い付きよ。後は月の光か。素直に立ち会ったのでは負けていたであらうよ」

「これだから浮世というやつは。思いがけない事がよく起こる。厄介極まりないわ」

「だが、それが面白い」

正家は、破顔した。盛大に、哄笑する。

三成も笑った。漢^{わき}二人、思い切り笑った。笑顔の木霊に、空が瑠璃色に染まっていく。

「三成、お前の言う通りだ。徳川の治世に、殊更大船は必要ない。……家康は交易をそれなりに重く見ておるが、息子は別だ」

「秀忠か」

徳川秀忠は、家康の息子であり後継者である。今は家康と離れ、江戸にいる。

真面目で堅実を絵に描いたような二代目。強いていうなら、どこか余裕が無かった。

「以前、話したことがある。儂が携わった職務の内、交

易には洩い顔をしていた。反面、検地に関しては深い所まで質問してきた」

「ふむ、その心は？」

「交易は、確かに莫大な利益を生む。しかし、誰かが得をすれば、誰かが損をする。つまり傷付くことになる。それはどうなのか、と申していた」

今と言う市場原理である。経済が健全に回るためには競争が必要であるが、度が過ぎれば過当競争となり要所に摩擦が生じ、不和が生まれる。

「平和が一番じゃ、慎ましくも穏やかに皆が暮らしていければいい。秀忠はそうにも申しておったな」

「つまり、農業を経済の基幹に据えたいと」

「というより、戦が心底嫌いなのだろう。だから、なるべく皆が血眼になって競争せずともそこそこ生きられる、そういう国を願っておるのではないか」

三成はその場にどつかと座り込み、唸った。

「これは、手強いかもしれんな」

この国の民は、安らぎを望んでいる。それは、正家と三成、共に領国統治の民政を為す中で感じ取っていたことである。

思えばこの国は、応仁の大乱以降、百年以上もの間、ず

っと戦火に灼かれ続けてきたのである。民草の心の中には、より良い生活を求める気持ちも勿論あるが、それ以上にただただ平穏な日常を希求する感情も根強く、奥深く存在していた。

この国の基幹産業は、米である。米を作る農民達の多くは、ただその年の収穫が無事に終わるだけを考えていた。それは一つの文化だった。彼等は先祖を祀り、土地と共に生きていた。この国の多数派は彼等農民なのだ。そして彼等の希望の受け皿としては、徳川秀忠という男こそ最適なのではないか。まして徳川家は三河以来農業を重視する大名である。

翻って、豊臣家とは交易に重きを置く商人の政権なのだ。その点からしても、豊臣家と徳川家の共存は難しいと言えた。体質そのものが違う。豊臣家はこれからも競争と発展を目指して外へ向かい、徳川家は逆に平穏と安寧を目指して内を充実させるであろう。

さて、この国の民は、どちらを選ぶのか？……流石の正家でも、これは分からない。

ただ、分かることもある。それは、徳川の治世に正家の居場所はない、ということだ。……徳川の御代にとって、長束の如き豊臣恩顧の大名は目障りでしかない。新しい世

の到来を万民に知らしめ、支配を盤石にするために、贅とされるであろう。

「まあ、殺されるであろうな。儂を嫌う者は多い。それに、豊臣の恩恵に浴し過ぎた」

「かも、知れんな」

「そうなれば当然、新しい船は造れぬ。それは、ちと困る」
「と、言う」と

「約束したのだ。丹羽様とな。……いずれ、日ノ本一の
大船を造ると。まあ、若い頃の、他愛ない話ではあるが……」

「つまり、似たもの同士か」

「業腹だがな」

正家はその場で大の字になり、背伸びした。

「儂は、貴様が嫌いだ、三成。だから此度は己の答えを見
出すために、利用してやった。これから、利用してやる」

「それでいい。私達は、それがいい」

「せっかく組むのだ。どうせだから、何故儂がお前を嫌
いなのか、教えてやる」

「興味深いな。聞こう」

「それはな、お主がいつも、輝いて見えたからだ。相手
が誰であろうと信念を曲げず、屈せず、億することなく言
いたいことを言う。しかも海に流れ込む大河のように、滔々

とな。教養も深く、言葉も磨き抜かれた舌鋒。相手も堪ら
んが、周りも堪らんわ。皆、保身のために汲々として口を
閉ざすというに。己の弱さを炙り出されるようで、苦痛で
あつたわい」

「今は？」

「先の立ち会いで、腹の奥底に澱んでいたものを一切合
切吐き出した。弱さも含めてな。そうなると、不思議と苛
立ちは消えた。ただ、お主に負けたくない。それだけだ」

「つまりは、お主も輝きを取り戻したということだな」

「そういう所だぞ、三成」

正家は懷から一枚の小判を取り出した。頬の血を親指で
拭い、小判に押す。

「持つていけ。血判代わりじゃ」

「豪壮だのう」

「もう、目に見える輝きに甘えるのはやめじゃ。儂は、
己で導いた答えに誠を尽くす」

小判は曙に洗われ、白金に煌めいた。

空に山吹色の帆が上がる。羅針盤は、心に。船出の刻が
来たのだ。

〈終〉